

名誉会長とのお別れ

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文



排球部(バレーボール部)練習風景(昭和5年)

昭和四六年から三六年間、愛知淑徳高校同窓会の会長を務められた同会の名誉会長の請井和子さん(愛知淑徳高等女学校卒、三四回生)が、去る十一月二三日に急逝されました。

故人の生前のご意志を尊重され、ご家族での密葬を終えられたあと、ご長女の裕子さん(愛知淑徳高校卒、二回生)がご挨拶にこられました。

請井名誉会長は、裕子さんと東京在住の次女の恵美子さん(愛知淑徳高校卒、三三回生)と箱根に温泉旅行にでかけられ、元気に旅と温泉を楽しみ、床につかれ、そのまま永遠の眠りにつかれたとのこと。

請井さんは、日本女性の平均寿命をごえられたとき、もう十分に生きただから、いとお別れしてもいい、とおっしゃっておられたとのこと。

この世でなすべきことをなし、悔いのない人生を送られての大往生です。

ご冥福を心よりお祈り致します。

*

請井さんが愛知淑徳高等女学校に入学される前年の昭和十二年、日華事変がおこり、日本は戦時体制へ入っていき

ます。学園も例外ではありません。

「昭和十三年の夏季休暇中に勤労奉仕が始まり、次第にそれが長期化して、出校日の方が少なくなりました。少ない出校日においても、軍服を縫うなどの作業や軍事教練が主体であった」(学園八十周年小史より)

右に記載の勤労奉仕は一言も言葉を発せぬ重苦しいものでした。

「八月二十七日より三日に至る五日間、全校職員・生徒が出校し午前八時より十二時まで校内にて兵隊用の下着縫いや学校近辺の下水工事場にて集団勤労作業に従事。作業中は全員無言とされた」(学園百周年史より)

こうした時代に、愛知淑徳で五年間(高等女学校は五年制でした)過ごされた請井さんは、排球部(バレーボール部)に入られました。

愛知淑徳排球部は昭和三年より五年連続全国大会に優勝するなど、淑徳スポーツ黄金時代の一翼を担っていました。

請井さんが一年生の昭和十三年にも全国第三位になっています。

戦時下、充分にとれない練習は淑徳魂で集中し、試合でもそれを発揮し、二位を勝ちとったに違いありません。きっと、その時の喜びは、重々しい空気の中

の、一筋の輝きであったことでしょう。

請井さんの一年先輩の水野淳子さん(高女三三回)が平成三年発行の同窓会誌「桜の美」に次の短歌をよせています。

十六歳のうた

ことごと郵便箱の鳴るごとに
胸とどろきぬ便り待つ日々

二〇歳のうた

春うらら防空壕の上に座し
萬葉集ひらく警報の間を

註(警報の間＝警戒警報と
空襲警報の間)

戦時下でも淑徳魂は生き、青春の輝きはあったのです。

*

様々の時代に懸命に生きた生徒たち、そうした積み重なりにより、今日の愛知淑徳はあるのだと、感謝の気持ちでいっぱいです。

ありがとございました。

合掌